

浜田市の江木君、秋穂町の末貞君の精霊に対し、衷心から御冥福を祈り合掌するものである。

【執筆者の紹介】

偶然にも部隊が同じ第三十九師団、略称藤部隊に所属。師団通信隊として、その後師団が昭和二十年五月、中国の黄河西側までの長々夜間行軍による大陸の端から端への行動、旧満州四平街、新京のあたりで対ソ布陣の準備を急ぐところで終戦。抑留拉致されたのが現カザフ共和国カラガンダ、炭坑での生活もまた同様、苦難の中でよく頑張られました。

帰国後、広島県蓮比婆郡庄原地区の地区長として会の統一推進に活躍。片や、地域の期待要望にこたえられて町議会議員となられたといえます。

私が今年度までに四回の慰霊訪問をさせて頂いたのも、この文中に出てくる炭坑労働の同志で、忘れることのない体験の中で亡くなられた友を訪ねたものであり、スパースクで今年度を最後に二四四体の御霊が政府の力によって全体収集されるその場所だからです。

稲村さんへの感謝と共に、読めばよむ程、苦しいけれど苦しさを喜びにかえ祖国への帰国を無事果たされた稲村さんを心より尊敬し、この稿に感謝を捧げます。

(広島県 山田 浩造)

抑留時代の思い出

愛媛県 木屋 隆行

一、終戦から抑留されるまで

昭和二十年八月八日、「直ちに原隊復帰」の命令を受け、南満州地区から派遣されていた十六人は、意味もよくわからないまま帰途についた。が、思うように列車は進まず、結局原隊地には程遠い公主嶺^{コウシュウ}で武装解除された。十六人の小人数では行動もできず、そのうち大きな部隊（東北訛りの人が多かった）に吸収され、国境の黒河で三、四日、満州での戦利品の食糧、機材等の運搬を朝から晩まで「ダワイ、ダワイ」の掛け声に追い立てられ、ようやく対岸のブラゴエシチェンス

クに渡り、広い練兵場のようなところでまた二―三日露宮させられ、そこでも満州から運んだ機材の運搬で「ダワイ、ダワイ」の叱咤であった。この間、一度夕方すごい雹に見舞われた。大きいのはピンポン玉ほどあり、露宮で逃げ場のない惨憺たる姿であった。

八月下旬、「トウキョーダモイ」に騙され列車に乗った。五十トン級の大きな貨車である。外から施錠され、外部を見ることができず、それでも時々補給か、すれ違いのためか、長く止まることがあった。誰かの磁石でどうも北上している様子。でもソ連兵の言葉を信じ、一路ウラジオストックに着くことを祈った。走ったり止まったりで幾日たったかもわからず、各人が持っている携行食も残り少なくなってきた。不安は段々と増していった。

ある朝、止まったところで「日本海が見えた！」と言う声に起こされ、とても美しい海辺の景色を小さな隙間から交替で眺め、その美しさに見はれたものであった。しかしそこは「バイカル湖」であった。喜びも束の間、今の今まで帰国を信じていただけに忿懣やる方

のない気持ちであった。

この間、色々なことがあった。将来の夢を捨て学業半ばで志願した仲間のうち一人は、この途中で病気のため逝った。別れ際、小さな声であるが「一緒にいきたい……助けてくれ」と、あの声は今でも頭に残っている。

九月下旬、今のウズベク共和国の首都タシケントの近くのアングレンという町に朝早く着いた。直ちに点呼、山の中腹に向かった。途中、大きな河（深くはないが川幅は広がった）に架かる今にも崩れそうな橋を渡り、目的の收容所（ラーゲル）に着いた。昼は過ぎていた。これから丸三年間の住まいであった。

このアングレンは炭鉱の町で、北は天山山脈続きの山、南はヒマラヤ山脈続きの山で、両方とも中腹以上は年中雪があった。西は砂漠で、東は人の話では前の河の上流で大きなダムがあるとのことで、しょせん私達抑留者を放し飼いできる恰好の場所であった。

ここでは私達日本兵のほか、ドイツ、イタリアまたポーランドの兵隊もいると聞いた。が、実際に会った

のはドイツ兵だけで、作業の途中彼らに会うと、十年の知己に会ったように手を振り声をかけて喜んでくれた。

このほか、ソ連の囚人もいたようであるが、この人達の監視は特に厳しく、一般のソ連人も私達も近づくことはできず、遠くで作業をしているのを見た程度で、どうも政治犯、思想犯の人達ではなからうか。

私達の作業の行き帰りは「銃」を持ったカンボーイが一人ついてきたが、二十一年の終わりがらから全くつかなくなり、私達だけで行動した。

一番方（〇〜八時）、二番方（八〜十六時）、三番方（十六〜〇時）の三交替で、休みは各番一日あった。

この地区の日本兵は一番多い時で六千人ぐらいたったという話である。私達のラーゲル（収容所）でも最も多い時で二千人近い人がいたということであるが、それはほんの少しの間とか……。

入所当時（二十年十月頃）は、夕方は相当冷えた。

半地下式の宿舎には、三百人程度が入っていたようである。このラーゲルは炭坑の第一、第三、第八、第九

の四炭坑と露天掘り炭坑の作業が主であったが、最初のうちは、我々が住む宿舎の増設工事と便所の増設、またソ連兵、ソ連役人の宿舎建設に殆どの人員があてられた。

十月頃から三〜四月頃の酷寒、大雪の中、川原から石を運搬し、石積みの家を造る。大きい石はハンマーで割り、小さいのはそのまま積み上げるのであるが、石と石の間には泥と石灰を水で捏ねたものを入れる。結構接着力はあった。凍り付いたかもしれないが、しかし地震でもあれば一発であろう。これは高級住宅である。一般住宅は、泥とおがくずを水で練ったものを木の形箱に入れて作る日干し煉瓦を積み上げて造った。

二、収容所の作業

少しの間、私達は前記の日干し煉瓦の運搬、所内の宿舎の建設、川原からの石の運搬等々、色々な雑作業をやらされた。「ダワイ、ダワイ」の掛け声を耳にしたことが出来るほど聞かされた。

食事は黒パン二百五十グラムと水のようなスープで、一応三度三度は食べられた。が、ソ連人と交換できる

持ち物は総て黒パンに変わった。また、食べられる雑草、ねずみ等々、岩塩で味をつけ食べた。

そのうち日本軍医、ソ連軍医（女性）による身体検査で、炭坑、建築工事、所内作業等々に振り分けられた。また、前職調査による作業職種の振り分けもあり、腕のよい職人さん達は優遇されたようだ。

こんなこともあった。私は志願する前は電気工学専攻で、入隊前鞍山市の製鉄会社の電気部精密工作課というところに学徒動員で籍をおいていた。そこで、この近辺に駐屯する部隊からの色々な無線機器の修繕を手伝った。どんなものかは知らないが、図面通りの回路で規定の電圧、電流が出るよう調整する作業であった。自分も手作り部品で短波受信機等を作り、外国の放送を傍受した経験もあった。

収容所で少し落ちついた頃、ラジオの修理の経験がある者の募集があり、私は応募した。二十人ぐらいいたと思うが、幸い私は選ばれた三人に入り、どんなことをするのか少し不安はあったが、カンボーイと通訳につれられてソ連役人の家に行った。そこには日本

（満州）で徴発した「満州電々〇〇型」といったラジオが倉庫に山積みされていた。それを聞こえるように修理するのである。

テスターがある訳でもなく、はんだ^{ごて}鍍すらない、当然はんだもない。そこで、近くにある火力発電所（この辺では一番大きな事業所）にはあるはずだと通訳に話し、一応ペンチ、はんだ^{ごて}鍍がきた。それまでにラジオを分解して修理の方法を相談し、B電圧からとるよう修理することにした。とにかく色々とやってみた。三台程大体直った。スイッチを入れると、浪花節の出来損ないのようなコーランがラジオから飛び出した。

ソ連役人のおかみさんは「スパシーボ、スパシーボ」の連発で、パンやスープを大御馳走になった。五日間の大極楽であった。他の戦友にはすまない気がした。

三、露天掘り作業

私は元気で年も若く、結局炭坑に回された。そこそ初めての作業で、今までの友と別れ、新たに編成された「露天掘りグループ」に入った。三交替制でグループ二十人程度であった。

表面の土を大型の機械で取り除いて石炭層を出し、それを私達が掘り出すのである。ソ連人監督からいろいろ教えてもらい、先ず「ブリもみ」といって、二メートルぐらいの鉄の棒（直径三センチメートルぐらい）の先にビョールカというキリ先を取り付けたもので、一メートルぐらいの間隔で五、六本の穴を掘る。これに発破屋が火薬を詰め、人払いをして点火する。緩んだ炭層をつるはし、えんぴで石炭を掘り出し、トロッコに積んで地上に運び出す。最初は思うように掘れず、監督から「ダワイ、ビストラ」の連発であったが、ある程度馴れてくると、ウズベク人のグループその他より大分多く掘り出すようになった。作業を進めるための要領のよしあしで大分の違いが出てきた。監督とも休憩時色々話すようになったが、お月さんがモスクワとこの地と二つあるとか、満州から取ってきた昭和初期の日本の会社のマークのある蒸気機関車を指さして「こんなの日本にあるか！」等、人のよさそうな監督ではあったが、教育の程度がわかった。しかし石炭を掘ることについては大変よく知っていたようである。

こんな作業をしながら休憩時地上に上がり、雪の下の草や、時折犬やねずみを捕まえ、スープにして食べた。夏は草も豊富で、その上、蛇、蛙類がよく取れた。ソ連人いわく、日本人が来て、犬、ねずみ、蛙の姿が見えなくなったと。でも雑草も時々毒草と知らずに食べ、大変なことになった人もいると聞いた。また、雑草取りで、石の下にいるサソリ、毒グモも多く困った。また、気に食わない奴の靴の中に取って帰ったサソリを入れることが流行し、皆が大変恐れた。また毒グモも面白半分で室に放したりする者があり、これにはソ連側から特に嚴重なる注意があった。雑草取りも命懸けであった。

半年ぐらいで露天掘り作業は終わった。どうも他のラーゲルの日本兵が引き続いてやるようであった。私達のラーゲルが遠いので、露天掘り近くの他のラーゲルと交替したらしい。

私達のラーゲルから歩いて五分程度のところに第九炭坑、それより少し西側に第八炭坑があり、それから歩いて十分ぐらいに第一、第二、第三炭坑とあり、私

は第一炭坑に移った。

四、第一炭坑の作業

昭和二十一年中頃から色々あり、編成替えて第一炭坑に替わった。初め三カ月ぐらいは一番危険な「ラワ」という作業で、日本の炭坑では「掘い」をかけると言うらしい。日本でもまた相当危険な作業と言われているとか。二本の本坑道の中の炭層を掘り出す作業で、作業にかかる前、先ずいざという時の「自分の逃げ場」をつくり、それから作業にかかるのである。立てた坑木は細いものを使い、八時間もつかもたないか程度のものである。幸い誰も事故に遭った話は聞かなかつたが、以前相当頻繁に事故があり、人も機材もそのまま、ソ連人も相当嫌がる仕事らしい。私達は何も知らずのんきなもので、そんな危険な作業とは知らず、狭く息苦しい仕事であるが、大きなソ連人より小さい日本人の方が向いているのか、断然出炭量が増え、監督は「ハラシヨールポーター」と大変褒めてくれた。

私は大の汗かきで、人と同じかまたそれ以下の仕事でも人の二〜三倍の汗が顔、背中に出る。監督は通り

すがりに背中を叩いて「ハラシヨール」と言ってくれた。炭坑からの申請か、一週間の「ハラシヨールポーター」で休養をくれた。二十一年の暮れのこと、皆から大変うらやまれたものである。

この休養中、他のグループの休養者五人とともにクリスマスツリーをつくる話が出て、申請したら早速許可になり、裏山（ヒマラヤ系の山で雪が深く日本兵の墓もある）の奥にもみの木をとりに行った。安全のためカンボーイがついてくることになったが、段々と奥に行くと、カンボーイは「ソ連人は怒まれているから」と言って「ここで待っている」と止まってしまった。

私たちは、それならとあまり遠くへは行かず、よい枝ぶりの樅の木を切ったが、途中少し高いところに部落を見つけ、少し登って行くとそこはウズベク人の部落であった。言葉は殆ど通じないが、私達抑留日本兵のことはよく知っているようで、手真似、足真似、半端なロシア語でいろいろ話し、ここで大変ご馳走になった。山羊の焼肉、チーズ、山羊の乳等々、どうも話はソ連の悪口だったようである。カンボーイが来ないわ

けである。

二、三月このラワ作業を続けたが、相当えらいソ連役人の視察があった。その前後から食事の量も質も大変よくなった。仕事もこのラワ作業から解放された。今までのように雑草や蛇、蛙のお世話にならなくとも、腹一杯にはならないが一応満足できるようになった。

作業も変わった。この作業は坑道の最先端の作業場に坑木を運ぶ作業で、地上の材木置き場から軽くて丈夫な材木を各々（五、六カ所）の坑道に運搬するため地上と坑内を数回往復する作業である。二人一組で、私の相棒は農家出身で三歳上の久慈さんといい、東北の人で早口なのでとどころどころわかりにくい言葉があったが、とてもよい人であった。

この新しい仕事に就く前に、誰かの休みの補充で、ソ連人とペアで作業するよう命じられた。このソ連人を「先山」と言うらしい。四十歳ぐらいの非常に大きな体格のよい男で、「ブリもみ」（炭層に穴をあける）をし、発破をかけて石炭を出し、鳥居形に坑木を立てて、坑道を一、二メートル進める作業をする。私はそ

の人の補助をし、出た石炭をトロに積んで、トロ押し（女性二人）がいる二十、三十メートル先までもって行く。勿論坑木を適当な長さに切り坑道に立てる仕事を二人でするのである。このソ連人は「ホーソン」と呼ばれていたと思う。本当の名は知らない。

仕事有一段落ついて休憩時の話で、どうも「ノモンハン事件」の時戦車に乗っており戦闘中キャタピラが外れ日本軍につかまり、ハルビンらしいところに一年近くいたらしい。その時の仕事は道路工事だったらしく、仕事はとても厳しかったという。静かに話す人で、手真似、カタコトの日本語も話した。相当苦労したらしい。その時の傷だと右足のかかとあたりが変になっていた。変な歩き方をすると思った。捕虜交換で命拾いしたと言っていた。

私は恐ろしくなった。てっきり仇をとられるなと思った。どうすることもできず、ただ交替時間のくるのを待った。その時間の長かったこと。彼は、今のラーゲルの食事、またラーゲル内のこと、色々聞いたが、下手なロシア語、日本語、手真似等々で現状を話した。

ようやく交替が来て、地上に上がった。ほーっとして大きな深呼吸をした。

無事何事もなくラーゲルに帰ったが、どうも心配でたまらず、本部に行き、くわしい話はせず、体調がよくないと交替を願い出た。が全然話に乗ってくれない。その頃は本部の連中は民主化グループとかいって調子のよい奴の集まりで、事務室で一日中、大仰なことを言っている連中である。私の話など全然聞く耳などないのである。

私は暗い気分であるが、覚悟をして一応元氣な顔して一生懸命仕事をした。休憩時間はない方がよいと思っただが彼は「少し休め」と言った。仕方なく腹を決め腰を下ろして休んでいると、彼は自分の道具入れの前で何かを出している。それはパンと菓子で、その上お茶を出し、「腹がすいたろう、食べよ。わしもあの時腹がすいて倒れそうになった、食べんか」と言っている様子。私の顔をのぞき込んで、しきりに何か言いがらパンとお茶を突き出してきた。私は何が何だかわからないが急に涙が出て止まらない。「スパシーボ、ス

パシーボ」と言ってパンを受け取った。「サルダート（兵隊）、泣くな、元氣出せ、そのうち必ず東京ダモイ」と言い、笑いながら、お菓子、お茶をくれた。

うれしかった。とてもおいしかった。あの時のことは今でもはっきり覚えており、一生忘れることのない出来事であった。

ラーゲルに帰り、色々と考えた。もし私が反対の立場の場合、あんな態度がとれるだろうか。疑った自分が恥ずかしかった。

十日程度の短い間の臨時作業であったが、一生忘れることのない思い出である。別の作業になっても、地上で時々会うと向こうから手を挙げ、「元氣か、もうすぐ東京ダモイ」と言った。

そのホーンソンという人は、元氣ならば九十歳以上と思われるが、私はこんな人に抑留中会えたことは大変幸運なことだったと感謝している。

仕事が変わり、監督が各先端現場の必要材を紙に書いて渡してくれる。材木置き場からなるべく軽く丈夫な材を探し、運搬車に乗せ坑内に下りる。あまり深く

なく、三十〜五十メートルぐらいの豎坑で、エレベーターは二台あった。運搬車に積んで各々の現場に持って行くが、近くなれば軽ければ一人で担い、重ければ二人で持って行く。五〜六カ所の現場に材を運ぶため地上と坑内を数回往復する。坑内には十〜十五メートルの斜坑が二カ所あり、斜坑には巻き上げ装置の運転に二人の女性、斜坑の手前と下にトロ押し的女性二人、一カ所の斜坑に四〜五人の女性があり、この人達は暇さえあればおしゃべりをしている。そこへ私達が行き、巻き上げを待つ間その女性達の話の中に入る。そのうち、私は大切にしていた(慰問袋に入っていた)女優さんの写真(いわゆるプロマイドで、「入江たか子」「田中絹代」「李香蘭」「桑野通子」「高峰三枝子」等々私は相当持っていた)を女性達に見せた。「これが私の姉」「これが私の妹」「これが親戚の娘」と、当時の日本の一流の女優さんは殆ど私の親族である。さすが女性達は驚いて、石炭で汚れた私の顔をまじまじ見ながら、着物姿、洋服姿、チャイナ服姿を見て色々と聞いてくるが言葉がよくわからない。特に着物

姿に質問が集中するが、もともと女性の化粧、服装のことなど今でも全然知らない。答えようがない。「うん、うん」と言うだけで、優越感に浸ったものである。いつも見せると値打ちが下がるので時々見せてやった。ところがである、「前にこれと同じ写真を見た」と言う女性があり、咄嗟にそれは私の兄だとその場を逃がた。私もソ連では、兄弟姉妹や親戚の人が増えたものである。彼女達がどこまで本気にしたかは知らないが、大切にする約束でこのプロマイドは彼女達に殆どやった。彼女達も、今元氣ならば、六十〜八十歳であろう。あの写真はどうなったであろうか……。

いずれにしろ、あの小さな炭坑では体の小さい、また材木等重要たい材料を肩に担いで素早く活動する日本人は大変重宝がられた。監督、女性、一般労働者達も、効率が上がりが出炭量が増えたのであろう、大変喜んでくれた。その揚げ句、「ぜひソ連に残れ」である。勧誘も相当なもので、「戦争に負け、焼け野原の日本よりソ連がましぞ」と言われ、中には本当に日本は駄目かもしれないと心を動かした人もいた。ラーゲルで小さ

い声で色々と話し合った。真剣であった。しかし、「国破れて山河あり、城春にして草木深し」、誰も残った者はいなかった。

春から夏にかけて川に洗濯に行くのがはやった。休日の天気の良い午後、休みの者四〜五人で行く。先ず拾った太さ四〜五ミリのアルミ線で籠の枠を作り、発破銅線で網を編む。大きさは深さ幅が約二十センチメートルぐらい、長さ五十センチメートルぐらい。これを三〜四個持ってゆく。勿論洗濯物を一杯詰めてゆく。各自水筒を二〜三個持ち、川に着いたら洗濯物をきれいにたたんでおく（洗濯物は洗濯済みのものを持って行く）。

ズボンをまくり上げ二人一組で上流に行き、魚がいそうなところに大きな石を川の中の石に思い切りぶつける。魚はその瞬間、水の振動でクルリとひっくり返る。それを下流で待つ二〜三人の者が籠で素早くすくう。ほんの瞬間の動作で、とにかく素早くすることがコツ。一回で多い時で五〜六匹、少ない時でも二〜三匹は取れる。籠に二〜三杯取るのに一時間は充分かかっ

た。

これを近くのバザールに持って行く。物々交換である。初めの頃は生きた魚で高値で交換できたが、段々と相手に見透かされ少なくなったが、ウオツカが水筒に二〜三本、ビール二〜三本と桑の実一袋ぐらいはあった。帰りに宮門のカンポイに水筒一本は取られた。これは別のグループの九州出身の三上という男に教わった。時々バザールで炭坑の知り合いのソ連人に会うと、魚を一籠取られることがあり、また川に帰り、取り直しをすることも再三であった。ソ連人、ウズベク人も、私達がやることを真似ることは全くなかった。彼等は決められたことはするが、自発的に自分たちの生活の向上に努力することのない民族なのであろうか。遅くなると二番方の連中と鉢合わせすることもあった。春から夏に一年の間五〜六回はウオツカ、ビールを拝ませてもらい、大勢の者が集まって、夕食のお菜の残り甘い桑の実を肴に、少し酔う程度であったが夜遅くまでお国自慢の料理、美人の彼女の話に花が咲いたものだった。夢の中で話の中のおいしい料理でも

食べられれば最高であった。

今まで述べたことは昭和二十二年以降のことで、それ以前はつらく、悲しいことが多かった。疲れ、つい水を飲みマラリアに、また赤痢にかかったり、はと麦や他の穀物のスープには殆どその殻が付いたままで運わるく盲腸炎にかかる人も多く、盲腸炎は大した病ではないと思っていたが、抑留中は大病で、亡くなった人もいたと聞いた。またマラリアは慢性的に発生し、多くの人が弱っていった。葉は黄色い錠剤で、これを飲むと胃を壊し他の病気を併発するというので皆敬遠した。マラリアは決まった時間に熱が出るため、予め水筒を集めて温め、毛布も集め、頭から温かい水筒と毛布で押さえ震えの止まるのを皆起きて見守ったが、それでも疲れて寝てしまうこともあった。

仕事から帰り食事も済ませ、ワラ布団にもぐり、お国自慢の地方のご馳走の話に花を咲かせ皆唾を飲み込みながら語った友が、翌朝冷たくなっていたこともあった。こんな時でも友を見送ることはできない。「ダワイ、ダワイ」と仕事に行かされる。帰ると誰がどのよ

うにしたか知れず、友の荷は総てなく、人の噂で鉄条網の外の雪を掘った跡に向かい手を合わせるだけであった。

休日の臨時作業の駆り出しもあった。ソ連側の命令であろう。体調の良否、用事の有無に関係なく、臨時の作業班を組み、色々な仕事をやらされた。こんな作業の指令は民主化運動のリーダー達で、この運動にあまり熱心でない私達がよく槍玉に挙げられた。真冬、道路下のマンホール掃除。濡れた時の着替えがないため禪一つで作業をした。また日干し煉瓦作り、これはしんどい。ノルマが大きく一番嫌な仕事であった。また貨車にバラ積みめのセメント降ろし、反対に貨車に石灰の積み込み等々、すべてノルマがきつい作業だった。

五、ダモイ

昭和二十三年春頃から、炭坑でも一般市民からも「ヤポンスキー、トウキョウダモイ」と言われてきた。収容所の食堂で食事する人員が少なくなっていた。今まで騙され欺かれた私達は信用せず、どこかに転属したと思っていた。

日は忘れたが八月中旬、一番方で朝収容所に帰った。今まで時々見たダモイの風景が見られた。所内がザワザワしている。「ああ、また人が減るなあー」と話しながら風呂に入り、朝食後「俺達に関係ない、早く寝るぞ」と寝台にもぐり込んだ。すると、寝込まないうち、「おい、お前等も今度は員数に入っているらしいぞ」と、いつもの臨時作業で憎まれ口をたたく民主グループの一人が言ってきた。

「本当かい、俺達、どこかの炭坑に転属かい」「馬鹿言うな、『日本新聞』読んどるか……今どんどん帰っておるんぞ、そのうちこのラーゲルも廃止になるんぞ」「へえ、本当かい、あまり喜ばすな。お前らは今まで嘘ばかり言っとったけんう」「わし達やソ同盟は嘘なんか言ったことないぞ。まあいいからそのつもりで支度せいや。その前に、お前の友達の上上が入院しとるぞ。どうも腸チフスカ何か伝染病で隔離病院に送られるらしいぞ。見舞ってやれや……」

三上君は志願した兵科も出身校も違うが、九州出身の豪放な人で、私達の後番ですれ違いが多く、休みの

時以外なかなか会えなかった。川の魚取りは彼に教わり、一杯飲んでも実に豪快で皆から好かれていた。

話を聞いてすぐ医務室に行ったが会えない。裏に回り、少し壁が高いが話はできた。「おい三上、どうしたんや。お前らしゅうないの、元氣出せや。何を食べたんや。わしは本当か嘘か知れんが、どうもここから出るらしい、帰るかも知れん。また何処かの炭坑に行くかも知れんのか。一応別れに来たんよ」「ほおか。お前帰るんか。ええのう。お前頼みがある。唄があるう。月が鏡であったなら、ちゅうやつよ。その月が出たら、月をわしと思つて一杯やりながら話をしてくれや。月が出たらでええけんのか」と小さな元氣のない涙声だった。

帰ると発表になっており、私の名も入っていた。タバタするうち、昼食後風呂に入れられて、自分のものは総て持てず、禪以外、飯盒、水筒、服上下、シャツ等、風呂から出ると一つずつ支給された。私は、収容所の友の日本での住所、本籍等書いた小さな手帳を新聞紙に包み、今回も名の出なかった友に正門前の横

で待っているところに投げてくれるよう頼んだが、運悪く投げたところを民主グループに発見され、あっさり取られてしまった。彼等もこんなことのないよう監視する役目だと色々弁解をしていたが、残念である。夕方乗車、入ソ時と同じ五十トン貨車であるが、今回は扉の錠は無かった。食事や生理現象処理にも適当に止まり、もう見ることはないであろうソ連の景色を眺めた。すれ違う貨車に戦車や兵隊を見た。また線路沿いの飛行場に戦闘機らしい姿も見た。まだ戦いは完全に終わっていない姿であった。

途中イルクーツクでシャワーを浴びさせてくれた。途中色々あった。アングレンと一緒に乗った人とも別れ、ようやくナホトカに着いた。アングレンで貰った靴が大きな口をあげ、取り換えを頼んだら、上が布、底が木の靴である。何もせず帰りの船を待つだけなれば上等と思った。

だがそうは問屋が卸さない。私達は十人一組で、長い柄（一・五メートルぐらい）の鎌の親分のようなもので、三十分は充分歩いた野原の草刈りである。九月

上旬の暑い時で、この作業を十日はやらされたと思う。夜は民主グループの学習である。約二十年の教育の殆どが間違いで、今の教育が正しいとのこと。納得はしないが反論する勇氣もない。ご無理ごもつともである。アングレンと一緒に出た人はもうとくに日本に帰っているのではなからうか。

九月中旬ようやく帰れそうな気配がした。収容所から港までは相当歩いた。底が木の靴ではあるが、心は浮き浮きしていた。

六、乗船、帰国

乗船した船は「明優丸」であった。船倉に入り、休む間もなく予防接種があった。腕と背中だったと思う。少しして熱が出たようで、気分が悪い。船中放送で出航したとのこと、気分はよくないが甲板に出てみた。港が小さくなっていた。気分が悪く船の人に話すと、すぐ荷物を持って上の方の船室に隔離された。船倉の方では、ソ連にいた時と立場が反対になり、次から次へと民主グループの連中が吊るし上げを食っている様子。船内放送で「せっかく同じ船に乗った仲間、全員

一人の欠員なく日本に帰りましょう」の意味の話があり、聞いてみると時々人員が足りないことがあるとのことであった。台風が近づいているとのことで、船は相当揺れた。大分遅れている様子。

朝、誰かが船倉の入口で「日本が見えたぞー」と叫んだ。殆どの人が甲板に走り出した。島か雲かよくわからないが、だんだんと陸地であることがわかった。夢にまで見た日本である。「帰ったぞー」と皆泣いていた。うれしかった。私達病人が一番先に下りた。途中、頭から足まで白い粉を降りかけられた。病院の二階の病室に入り、やっと落ちついた。色々な手続をし、家に電報も打ってくれた。

大金九百円を戴いた。早速このお金で煙草を買いに行ったら人が驚いて走って帰り、「この『光』が三十円とお。三十銭かと思ったら三十円と言うから、間違いだらうと言うと箱に三十円と書いてあると言う」。皆は「嘘言うな、幾ら何でも三十円ではない三十銭じゃろ。お前騙されおるんじゃ」「この箱を見いや、定価三十円と書いとろ」。九百円は大金と思ったが……。

「これで一杯やれると思ったが、これじゃ出来んのお……」。

二三日色々な検査、調査があり、大変忙しかった。医者に早く帰してくれるよう懇願したが、駄目であった。

ある夕方、慰安会があった。岡晴夫さんの唄を初めて聞いた。女の歌手の人の名は忘れたが、とても楽しい日であった。ひょいとアングレンで別れた三上を思い出し、外に出てみると大変よい月が出ていた。寝る前の検温に来た看護婦さんに三上のことを少し話し、貰った九百円でお酒は買えないか頼んだ。「病院ではどんな理由でもお酒は飲まれません、また今お酒は売っておりません」と強く断られた。私は諦めた。退院でもしてゆっくり約束を果たすことにした。

翌日、夕食後消灯まで散歩して夜の芝生に座って月を眺めていたら、昨日の看護婦さんが来て、少し抑留中の話をして「おやすみなさい」をして別れる時、薬瓶に入れた日本酒約一合と盃のようなものを出し、「絶対に人に言ったらいかんよ、いい？ くれぐれも人に言うたらいかんよ」と足早に向こうに行った。一

度振り返り手を上げて去った。私は無理を言つて誠に申し訳なかったと後悔したが、好意に甘え少し頂いた。人に見つからないよう大切に飲ませてもらった。それから時々その看護婦さんに会った。ニコリ笑うだけであつた。

数日舞鶴の病院におり、故郷の近くの病院に移るこ
とになり、その看護婦さんを探したが見つからず、他の看護婦さんに名を聞いたが教えて貰えなかつた。お世話になつた旨伝言して病院を出た。京都弁で女優の香川京子さんに似た優しい人だつた。五十年経つた今でも、月を見ると三上とその看護婦さんが浮かんでくる。

今まで抑留中のことを思い出し述べたが、八月八日齊齊哈爾を出発、八月下旬公主嶺で武装解除にあう約一カ月弱の間、再三地獄の様を見た。

南下の途中、中国人かと思われる暴動による列車の長時間停止の折である。近所で人の悲鳴が聞こえるというので、四、五人で偵察に行くよう命令され、捜索したところ、女の人が洗濯をしていたのであろう、

子供を背中にしたまま倒れている。女の人も子供も首がない。その辺りが血の海である。水道は出たまま。犯行は直前らしく、徹底的に捜したが捕らえることはできなかった。近くの家からえんぴ（小型のシャベル）を持ってきて、この母子と付近の血のついた土を始末して帰つた。

また、別の駅では、食糧調達の途中暴動に遭ひ、小さな戦闘をした。その帰り、沼に二人の日本兵の死体が浮いていたが、それを棒で除け、水だけ飲んで早々に引き揚げた。この付近では再三小競り合いがあつたらしい。

また、公主嶺の駅の警備をしている時、人の悲鳴が住宅街で聞こえるとのことで、五、六人が変装して住宅街を見回つた。男たちの笑い声中で悲鳴を聞いたが、ソ連兵が近くにおり、いかんともできず引き揚げたこともあつた。また喧騒の溜まり場の中の悲鳴に、手榴弾を投げ込み大音響と共に静かになつたこともあつた。駅付近ではぐれた子どもが親を求め、また親が子どもを必死に探している姿を見た。また大勢のソ連

兵の侵攻による兵士達の略奪、婦女暴行はおびただしいものがあつた。戦に敗れることは、戦に直接関係ない女子供が大きな犠牲を強いられるものである。あの多くの女性達、子供達の霊は一体誰がどのように慰めるのである。沼で亡くなっていた兵士の「認識票」さえ持たず逃げた不甲斐ない私達、今思い出しても悔やまれてならない行動であつた。

南方での転戦転戦で、食べ物もなく餓死された方々の話を聞いた。マスコミや一部文化人達の従軍慰安婦の問題、南京大虐殺の話、満州第七三一部隊の話等はよく耳にし、また記事も見るが、あの終戦時の満州での生き地獄のような話は殆どないのが残念である。今の国の繁栄とともに贅沢にいくら慣れても、五十年前のあの苦しみとあの多くの人々の犠牲の上の繁栄であることををいつまでも後世に伝え、二度とこの過ちを繰り返さないようにして欲しいものである。

最後に、私達が作業の行き帰りよく歌った唄（軍歌の替え歌。作詩者は入ソ当時の部隊長加藤大佐とか？）を記す。

一、 男泣きして 詔を拜し

やむなく捨てし銃と剣

十年鍛えし我武の誉

諦めがたきぞ是非もなし

二、 山の淋しいアフガン近く

ここは中ア（中央アジア）のアングレン

夏は水沸き草木も枯るる

冬は降る降る雪霰

三、 国の償い果たさんものと

夜毎掘り出す黒ダイヤ

君の御ため同胞のため

務め果たさん心意気

【執筆者の紹介】

大正十四年、福岡県に生まれ、電気関係の技術を習得。入ソ後も技術を生かして、強制労働もこなしてきた知的な紳士である。

復員後も長年四国電力に奉職、電力所所長など管理職の責任を果たされてきた。最近では愛媛県支部の理事

として敏腕を振るっていただいております。

(愛媛県 山本 繁夫)

コムソモリスクの酷寒で夜間作業

愛媛県 山本 繁夫

八月十七日に武装解除を済ませてソ連軍の軍門にくだった。雑囊に新しい軍足(靴下)に白米を詰め込んだのを二本と乾パン二袋を入れ、徒歩で図們の満鉄男子宿舎に入り一週間ばかり過ごした。この間は隣接の陸軍病院へ使役に出て、ソ連軍の血だらけの包帯を敷地内の小川で洗濯をしたくらいは軽作業であった。宿舎の塀に沿って二メートル以上の背丈のひまわりが、直径三十センチくらい大きな花を太陽に向かって雄々しく力強く咲かせているのを見て、何と男らしい元気な花だと、敗戦によって消沈していた私の心を鞭打ってくれた。

翌日やはり塀に沿って何気なく散歩していると、八

センチと十一センチの大きさで五ミリくらいの厚さの『日露会話帖』が、置いてあるのか、わざと落としてあるのか、目についたので思わず手に取って見ると、ダブルウートロム、ダブルベーチェレムとか、日本語のカナ文字と漢字で、お早うございます、今晚は、とか書いてあるではないか。これは便利な品が手に入ると内心喜んだ。

私は終戦を知った瞬間、これからソ連領内に連れて行かれ、ソ満国境の要塞地帯の再建設に従事させられると思った。また、平岡正夫中佐が部隊長として最後の訓示を全員にされた際にハッキリと、「これから恐らくソ連国で色々な作業をさせられ皆を真綿で首を締めるように労働で苦しめるけれど、それに負けぬよう、協力して皆無事に日本へ帰ってくれ」と、懇々と話してくれたので、当時十九歳の私はまともに受け、信じていた。

図們的宿舎から延吉の飛行場へ移り十日ばかり過ごしている間に、一生懸命にロシア語の会話を覚えたのである。延吉から百キロ行軍とか二百キロ行軍とか言